

反復性肩関節脱臼によりMorgan法を施行した一例

名市大病院 石田和人

【要旨】反復性肩関節脱臼により関節鏡視下関節唇縫合術(Morgan法)を施行した症例紹介し、術後の理学療法について検討した。関節唇縫合部の安静を4週としその後rotator cuffの機能的促進、固有受容感覚の賦活を考え治療を進め16週にてflex170°、abd160°、ext-rot 80°となりADL上支障なく終了した。本法は外旋制限が少なく又、女性においてはCosmeticな面からも有効と思われた。

Compression Hip Screw法後の膝関節障害に対する一考察

平野総合病院 小野昌代

【要旨】大腿骨転子間及び転子下骨折の不安定型にCHSを施行し術後膝関節に障害を生じた症例について運動学的に検討した。術後3週にて理学療法を開始した時点で膝70度の主な制限因子をITTのgliding障害及びadhesionと考え、TFLに対しその機能やpositionを工夫し治療することで3週にてflex140°、lagは消失した。消能解剖や病理学を考慮し治療を進めたことが有効であった。

上肢に高度挫滅創を呈した一症例

碧南市民病院 浅野明裕

【要旨】上肢挫滅により皮膚剥離、筋挫滅、神経障害、血管断裂、靭帯損傷を生じた症例の経過をROMの面から検討した。ROMの制限因子としては神経麻痺、筋の挫滅靭帯損傷の影響が大きかった。浮腫の軽減のためハドマー、tapping、筋収縮の利用、癒着に対してはisometric muscle contractionを利用したROM-exを用いることで満足いく結果が得られた。

膝関節拘縮の剥離術を経験して

国立津病院 岸田敏嗣

【要旨】floating kneeに対する剥離術後の理学療法の紹介と共に、膝関節拘縮について検討を加えた。癒着の強かった膝蓋上包と中間広筋遠1/2を剥離し術中120°にてシーネ固定した。剥離後4日目より坐葉を併用しながらisometric-ex中心に治療を進め4週でFlex125°、Ext-10°、16週にてなんとか正座可能となった。膝関節拘縮で癒着の多いのは中間広筋、膝蓋上包、内外側支帯であり、術後いかにこれらを癒着させないか解剖学的に考えることが必要である。

足底装具挿入により著明な膝痛の軽減をみた変形性膝関節症の一症例

松本義肢製作所 篠田信之

【要旨】麻痺側に変形性膝関節症を合併し膝痛により歩行不能であった症例に対しアーチサポート付プラスチック短下肢装具を作成した。装具装着により痛みが消失し歩行可能となった。現在のところの適応としては荷重時に下腿の内旋を伴ったFTAの増加および疼痛が挙げられた。この理由としてアーチサポート挿入により三次元的なアライメント矯正が除痛につながったと考えられる。